# ボランティア便り

第1号（年3回発行）

## 《7月豪雨災害講演会》

真夏のように暑かった9月が過ぎ、やっと秋らしい爽やかな季節になりました。今回は7月豪雨災害と対応を振り返り、日頃からの備えを学ぶ講習会を10月13日に開催しました。平日開催にもかかわらず、会場に32名とZoomを使ったオンラインで3名の参加がありました。

浦川豊彦会長

当日、国土交通省からの演者が別の会場とのかけ持ちだった関係で、遅めの午後2時から開会され、発表順で社協とボラ連の活動報告が先になりました。

久留米市社会福祉協議会　古賀正博さん
久留米市災害ボランティアセンター
「今回の災害ボランティアのまとめ」

久留米市内の被災者支援は、2018年から6年間で7回もの災害ボランティアセンターを立ち上げ対応してきましたが、今回は過去最大規模となりました。7月10日の災害発生の翌日から東部と西部の災害ボラセンを立ち上げ、9月23日の活動期間中に、派遣依頼751件に対し、延べ7471名ものボランティアを派遣しました。

残念なことは、市内からのボランティアの参加が2割弱に留まったことです。

古賀正博さん

ボラ連会長　浦川豊彦さん
「未使用タオル収集と氷冷タオル支援」

災害直後14日の事務局会議で個別団体による支援の他に、ボラ連自体でできる活動はないかとの議論から生まれたのが、この度の全団体への未使用タオルの収集依頼と氷冷タオル支援です。

演者は6年前2017年の朝倉・東峰村・日田を襲った未曾有の大水害の泥出しボランティア活動に通算18日間参加した時の写真で当時の体験を語りました。

猛暑のなか活動を終えた後のキンキンに冷えた濡れタオルで「生き返った」この時の経験から、単にタオル収集だけではなく、氷冷タオルを手渡ししするものでした。この呼びかけに応えて55の団体と個人から3千枚弱のタオルが寄せられ、猛暑日の週末4日間でしたが、フードバンクで作った約30kgの氷を持込み、毎回100名前後に提供し、好評を得ました。

次に備えて、残った数千枚をタオルと雑巾に仕分け、防湿・防臭のために立花バンブー製竹炭を同梱し、フードバンクくるめの城島倉庫に常時保管しています。

竹炭を入れて防湿・防臭保管

農業公園にて好評だった氷冷タオル支援

## 国土交通省筑後川河川事務所　髙橋史哉さん

### 「7月大雨災害被害報告」

近年多発する大雨の際、刻々と変化する河川とダムの水位や冠水情報などをネットや地デジを見て、身を守る避難行動に繋げることは、久留米市民の梅雨末期の生活の一部となりつつあります。

温暖化に伴う線状降水帯の頻発により想定を超える集中豪雨を今までの堤防やダムだけで受けとめることが、できなくなり、流域各所で協働して水害対策を講じる流域治水の時代になりました。

一例として、今回も氾濫を起こした巨瀬川の水位が10分単位で急激に上昇し氾濫に至った連続写真を提示されました。

この講演では、日頃から一般的に知っておく必要なことを教えていただきました。ネット活用をすれば、全国の河川とダムの水位情報、河川カメラなどを活用すれば、自宅にいながらリアルタイムで現状を把握でき、外出による事故を避けて判断できます。そして、デジタルデバイド（情報格差）＝ネットができない周りの人に正しい情報をお伝えできるのではないかと思いました。

ネットが使えない方でも、地デジのデータ放送を見れば確認でき、それぞれが、各自治体が提供しているハザードマップを事前に把握しておけば、浸水状況や土砂災害危険度を確認して避難の判断をする目安になる等、個人の意識も身を守るために必要な情報を周知しておく必要があるのではないかと思いました。

また、市民は情報を受けるだけではなく、河川の異常（橋の崩落、堰堤の破損など）があれば、直ちに市・県・国の土木事務所に連絡して欲しいとのことです。

髙橋史哉さん





## 有用な水害関連情報のサイト紹介（QRコード）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 川の防災情報 | 筑後川水系<br>雨量・水位情報 | 気象庁・<br>キキクル | 久留米市<br>ハザードマップ | 重ねるハザード<br>マップ3D | 河川情報アラーム<br>メール申込 |
| 国土交通省 | 筑後川<br>河川事務所 | 気象庁 | 久留米市 | 国土地理院 | 国土交通省 |
| 降雨・川やダムの水位情報、河川カメラ | | | 被災想定・避難所の地図 | | メールで受取る |

## 久留米大学教授　松田光司さん
## くるめ災害支援ネット・ハッシュ会長

### 「災害にそなえる」

演者の災害ボランティア頻回参加の実体験に基づいた講演で、始めから終わりまでずっと前のめりで拝聴しました。

今回の災害を写した数々の写真では、土石流災害の様子、畳や家財道具の搬出作業や床下土砂の撤去作業も含め、自然の怖さも改めて実感しました。

ただし、酷暑の中での厳しい肉体労働のみが繰返し報道されたため、災害支援が一部の強者に限定されるという誤った固定観念化を生み出している、と演者は指摘します。

被災者の各種の要望に応えられる潜在的な協力者・企業は、必ずいます。それらといかに繋がり、組織化して多様かつ迅速な支援ができるかです。例としてあげられたのは、高齢者による雑巾支援、ボラ連の氷冷タオル支援、ドローン活用支援、食事支援、家電支援などです。

日頃より災害にそなえることは、命を守る意味で大切です。実際の災害に学び、自分の身に起きた場合をイメージし、多様な準備を思い描くことです。

地域でもできることがあります。例えば、災害廃棄物の仮置き場を予め決めておけば、慌てて捜す必要はありません。

一緒に考え、まだまだ多種多様な「そなえ」を考えさせられた講演でした。

教訓

- 災害のボランティア≠体力自慢の人だけ
- 今からできることは沢山ある。
- できたかもしれないこと
- まだ気づいていない、できることはまだまだある。

松田光司教授

## アンケート調査の結果

・参加して、大変勉強になりました。
・国交省筑後川河川事務所の、お話は、専門的な用語があり、少しわかりませんでした。
・資料が、配られたら、良かった。
・松田先生のお話は、写真が多く、分かり易かった。
・災害になった時の事を、事前に、地域で話しておくことの重要性を感じました。
・7月豪雨の説明・写真などで、改めて、その被害の大きさを確認しました。また、その後のボランティアの必要性と、重要性を再確認しました。大切な勉強会でした。
・ボラ連独自の「冷水タオル支援」は、酷暑の中、大変役に立った素晴らしい活動でした。
・毎年災害が発生する中、各お話は、今後の備え知識に役立ちます。出来る事を探します。
・松田先生のお話が、特に残りました。備え、そして、地域との繋がりの大切です。どうしても、誰もやりたがらない事ですが、事前に決めておかねばならない事など、仕組みも勉強になりました。
・酷暑の中、被災地に駆けつけられた方々に、本当に頭が下がります。
・事業所の自然災害に関するBCP（事業継続計画）の見直しにも、参考になる内容でした。
・災害ボランティアと言うと、力仕事がメインと思っていましたが、心に寄り添う事、自治会と繋がる事、企業と組むことなど、とても、為になりました。
・地域でも、色んな活動に備えねばならないと思いました。良かったです。
・未使用タオルは、提出したが、詳しい内容は、知らなかった。役に立っていることが分かった。
・冠水道路を迷走する車で、被害が広がる事は、初めて知りました。
・講演を聴いて、自分にできる事は何だろうと、思いました。
・体力に自信がないので、災害ボランティアに見合わせていたが、後方支援など、自分にも出来ることがあると、感じた。
・今後、ネット情報をもう少し確認して、広げておきたい。
・災害支援の大変さが、被災に直面したことが無かったので、痛感しました。

◎オンラインZoomに関して
・ハイブリッド方式での研修会は、凄く良かった。
・前半の、ハウリング（キーンと言う音）が耳につき、頭が痛かった。
・演者がマイクから離れると聴き取れなかった。

事務局から
過去数年前から高速光回線導入、オンライン機材の購入、交流学習会の配信を進めてきました。これからは、「質」の向上を目指してゆきます。

◎今後取り上げて欲しいテーマや企画は？
・これからの食糧事情について
・被災者が、困った事（改善したほうがいい事）や、災害ボランティアの生の声の企画
・ボランティア活動の活性化

### 会費納入のご案内

当会は、加盟団体の年会費と社協からの助成金で運営されています。現在11団体が未納です。ご理解のうえ協力をお願いします。